

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 4 日現在

機関番号：34504

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720190

研究課題名(和文) 台南文学の研究 日本統治下の日本語文学を中心に

研究課題名(英文) Tainan Literature under Japanese Colonial Rule

研究代表者

大東 和重 (OHIGASHI, Kazushige)

関西学院大学・法学部・准教授

研究者番号：60434859

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円、(間接経費) 480,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本統治下にあった戦前の台南における文学活動を、日本語文学を中心に、いかに都市台南を表象したかという視点から研究するものである。台湾の古都台南は、佐藤春夫が1925年に発表した「女誠扇綺譚」以来、日本語による文学表象の対象となり、西川満「赤嵌記」や庄司総一『陳夫人』、新垣宏一「砂塵」などが続々と書かれ、台湾人の詩人呉新榮や楊熾昌も活躍し、また前嶋信次や國分直一による歴史学・民族学研究の対象ともなった。本研究では、文学による台南表象を、当時の歴史的な文脈と照らし合わせつつ研究し、同時にこの作業を通して、周辺からの文学史の再考を試みた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to examine the representation of Tainan, the oldest city in Taiwan, by Japanese and Taiwanese writers in Japanese. SATO Haruo wrote Jyokaisen Kidan in 1925, which was the start of the Japanese literature in the Japanese colonial period. Then NISHIKAWA Mitsuru, SHOJI Soichi, NIIGAKI Koichi, Gô Sin-îng and Yang Chi-Chang wrote many kinds of literature depicting Tainan respectively, while NIJIMA Shinji and KOKUBU Naoichi conducted historical and ethnological research of Tainan. I traced and inspected the literary history of Tainan, at the same time rethought the concept of literature in the mainstream of Japanese modern literary history.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：台南 台湾 文学 植民地 日本文学 外国文学 比較文学

1. 研究開始当初の背景

台湾南部の中心都市台南は、約400年前にオランダが拠点を築いて以来、鄭氏政権から清朝時代の末期まで、一貫して台湾の中心地であった。台南の地には、原住民である平埔族、オランダ人、漢族、さらに1895年以降は日本人のもたらした文化が、地層のように積み重なり、南、東、北の三方に向かって開かれた、多元的な都市空間を形成した。

中でも、日本統治期に花開いた、日本語による文学は、植民地の地方都市であったにもかかわらず、著名な文学者や学者が関係しており、台湾文学史においてのみならず、日本近代文学史を考える上でも重要な一角を成している。また台湾文学・日本近代文学を再考する上で、他には換えがたい切り口を提供すると思われるが、これまで十分な注意が払われてこなかった。

近年、『台南新報』(『台湾日報』)など、1920年代から40年代前半の台南文学を考える上で不可欠の資料の復刻が進められている。また、『日本統治期台湾文学 文芸評論集』や『日本統治期台湾文学集成』などの資料集の刊行も、研究を進める上で大きな助けとなる。台湾での研究の進展も目覚ましく、呉新榮や楊熾昌研究など、台南出身の作家の文学活動について、着実に研究が深められている。こうして資料の整備が進み、本格的に台南文学の研究を行う状況が整いつつある。

2. 研究の目的

本研究では、日本統治下の台南文学のうち、日本人によって書かれた、佐藤春夫「女誠扇綺譚」以来の、日本語文学の系譜に重点を置き、歴史学や民族学者による台湾研究、また台湾人の文学活動や、中国語の文学もこれと関係させつつ、視野に入れた。

主要な研究対象として、佐藤春夫・西川満・庄司総一・新垣宏一・呉新榮・楊熾昌らを設定し、台南と直接関わる創作活動について研究を進めたのみならず、間接的に台湾文学と関わる、昭和文学・植民地文学・外国文学の資料も押さえつつ、台南との接点を中心に検討を加えた。

このようにして、台南文学史という、植民地の地方都市の文学を論じる、マイナー文学史を記すことによって、中央のメジャー文学史を相対化する試みを目指した。

3. 研究の方法

近年台南研究は飛躍的に進展したが、日本統治下における文学活動に関する研究は、まだ端緒に着いたばかりである。またこれまでは佐藤春夫「女誠扇綺譚」など、研究がごく一部の作品に集中してきた。しかし台南を舞台に創作した作家は佐藤だけではない。佐藤に続いて台南を描いた西川満の「赤嵌記」や、台南で育ち中央文壇で認められた庄司総一「陳夫人」、台南で教員をしながら台南を写実的に描いた新垣宏一の「砂塵」「城門」な

どが続々と書かれた。また呉新榮・楊熾昌らも台南を舞台に文学作品を発表した。本研究では、これら日本統治下における日本語による台南文学の系譜を明らかにした。

すでにイスラム史学者前嶋信次の描いた台南や、考古民族学者國分直一の進めた台南の平埔族研究について研究を行い、その過程で、戦前台湾の新聞・文学雑誌や民俗学の雑誌を通覧し、台南関係の作家や文学作品にどのようなものがあるか、大枠を理解していた。その延長線上で、日本人と台湾人の作家について研究したのが、本研究である。

それらの作家は、呉新榮や楊熾昌のように台南で生まれ育った台湾人もいれば、新垣のように一時的とはいえ台南に居住した日本人、佐藤や西川のような内地や台北からの旅行者、あるいは庄司のように一旦離れてから台南を描いた作家もあり、多種多様な立場から台南を描いた。これらの作家を、当時の台湾の文脈だけでなく、日本の中央文壇との関係において捉え直す作業を行った。中国文学のみならず、日本近代文学史についても比較文学の手法を用いて研究を進めてきた経験を生かし、台南文学を多角的に検討した。

また本研究は、日本統治下の台南という、植民地のしかも一地方の文学史を描くことで、中央の文学史を相対化することも目的とした。これまで書かれてきた日本近代文学史の多くは、東京を中心に、一部の特権化された作家たちの名作を扱うことで成り立ってきた。しかし文学という営為は、日本の地方はもちろん、植民地の、それも台南という地方都市においても盛んになされ、中央の文壇は、地方に多くの読者や作家予備軍を供給源として持つことで支えられていた。上記の台南文学の研究と並行して、同時代の昭和文学についても、台南から光を当てる作業を試みた。

4. 研究成果

日本統治期における日本語による台南文学の研究では、以下の論文を発表、成果をあげることができた。

(1)「庄司総一『陳夫人』に至る道 『三田文学』発表の諸作から日中戦争下の文学へ」：庄司総一『陳夫人』は、1940年に刊行され、大東亜文学賞を受賞するなど注目されたのみならず、台湾文壇でも、台南の伝統的な旧家に嫁いだ日本人女性を描いて成功した点で、衝撃として受けとめられた。本研究では、庄司が『陳夫人』に至るまでの、『三田文学』等に発表した諸作を検討、文壇の成功を求め試行錯誤の跡をたどり、日中戦争勃発後の文壇における流行の傾向を察知した庄司が、積極的に植民地台湾で育った経験に材を求め、文学的人生を賭けた過程を描いた。『陳夫人』の影響力、及び庄司の作家としての経歴は、日中・太平洋戦争下の文学を考える上で欠かせないと思われる。

(2)「植民地の地方都市で、読書し、文学を語り、郷土を描く 日本統治下台南の塩分地帯における呉新榮の文学」

：本論文は、日本統治下台南近郊の塩分地帯の文学者、呉新榮が残した作品や日記などの資料を通して、1930年代の植民地の地方都市における台湾人作家の文学活動について概観した。東京留学から戻った呉新榮は、医業のかたわら、内地や台湾の新聞や雑誌、書籍を熱心に読み、地元の文学青年たちや台湾全島の文学者たちと文学団体を結成し、郷土を描く詩や郷土研究のエッセイを発表した。呉新榮の活動には、1930年代における、台湾人作家による台湾文壇の成立 台湾人作家たちが、熟達した日本語を用いて、台湾人読者に向けて作品を書く状況の成立 が刻み込まれている。

(3)「古都で芸術の風車を廻す 日本統治下の台南における楊熾昌と李張瑞の文学活動」

：楊熾昌と李張瑞は、1930年代の台南で、文学団体「風車詩社」を結成、雑誌『風車』を刊行して活動を展開した。楊熾昌は現地紙『台南新報』の学芸欄の編集もしており、『風車』と『台南新報』に集まる若い詩人たちの文学ネットワークができつつあった。本論文は、楊熾昌を中心に、李張瑞にも触れつつ、日本留学経験、台南における文学活動とその文学論、さらにその詩について論じた。楊熾昌は東京留学で、1930年前後の日本で流行していたシュルレアリスム詩を受容、台南に戻ってから芸術至上主義にもとづく文学運動を展開したが、そのシュルレアリスム詩は、単に純粹芸術を志向するのではなく、楊の直面していた植民地統治の現実に対する一つの声であった。

(4)「新垣宏一と本島人の台南 台湾の二世として台南で文学と向き合う」

：台湾の高雄に生まれ育った新垣宏一は、台北で教育を受け、1937年から台南の高等女学校で教師をしつつ、民俗研究や創作に励んだ文学者である。台南では、台南の民俗や歴史の研究、あるいは生徒の大半を占める台湾人子女を通して、台湾人の生活に触れ、やがて台南の台湾人を描く小説を書くようになった。本論文では、新垣の短篇「城門」などの創作が、植民地統治への批判を意図したものではなくとも、台湾の二世としての経歴、台南滞在と研究、台湾人たちとの接触などの経験から、「台湾の真実」が流れ込み、植民地統治に対する批評となりえていることを論じた。

また現在、佐藤春夫と西川満の台南を描いた文学作品について、研究を進めている。それらを、本研究を開始する前に論文化していた、前嶋信次・國分直一の研究、本研究において論文化した、庄司総一・新垣宏一につい

ての研究と併せて、六人の日本文学者を論じた研究書『日本統治期の台南文学 日本人作家篇』(仮)にまとめ、2014年度内に刊行予定である。

また、2014年度以降も、これまで収集した資料を用いて、呉新榮・楊熾昌ら以外の台湾人作家について、研究を進める予定である。最終的には、こちらも一冊の研究書にまとめたいと考えている。

また上記の研究を進める上で、日本統治期の台南文学と関わる資料や研究書を購入した。ことに、台湾文学を論じる上で基本となる資料や、台南文学を比較文学的に論じる上で必要となる書籍を購入することができた。これらの資料については今後も継続して分析を進めたい。

また、年一回の現地調査を計3回行った。台南の台湾文学館や、台南市立図書館、台北の国立台湾図書館、台湾大学図書館等で、関係する資料の調査・収集を行ない、台南文学と関わる資料や書籍を閲覧できた。現地の図書館のみが所蔵する資料・書籍も多く、成果があった。さらに現地の文学研究者と意見を交換するなど、大きな収穫があった。今後もこれらの資料や成果を生かした研究を継続したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

大東和重、新垣宏一と本島人の台南 台湾の二世として台南で文学と向き合う、外国語外国文化研究、査読無、第16号、2014年、pp.121-152

大東和重、古都で芸術の風車を廻す 日本統治下の台南における楊熾昌と李張瑞の文学活動、中国学志、査読無、第28号、2013年、pp.27-57

大東和重、植民地の地方都市で、読書し、文学を語り、郷土を描く 日本統治下台南の塩分地帯における呉新榮の文学、日本文学、査読無、第61巻第11号、2012年、pp.35-46

〔学会発表〕(計3件)

大東和重、新垣宏一の見た台南 「女誠扇綺譚」から「第二世の文学」、「本島人の真実」へ、東京台湾文学研究会例会、2013年6月22日、東京大学

大東和重、植民地の地方都市で、読書し、文学を語り、郷土を描く 日本統治下台南の塩分地帯における呉新榮の文学活動、中国文芸研究会例会、2012年10月

28日、同志社大学

大東和重、庄司総一『陳夫人』に至る道
『三田文学』発表の諸作から日中戦争
下の文学へ、台湾中央研究院人社中心
亞太区域研究專題中心国際シンポジウム
「日本文学における台湾」、2011年10月
7日、台湾中央研究院（台湾）

〔図書〕（計1件）

大東和重、庄司総一『陳夫人』に至る道
『三田文学』発表の諸作から日中戦争
下の文学へ、日本文学における台湾、台
湾中央研究院人文社会科学研究中心
亞太区域研究專題中心、2011年、pp.1-18

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大東 和重 (OHIGASHI, Kazushige)
関西学院大学・法学部・准教授
研究者番号：60434859

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：